「自力更生」と大寨〔I〕

小　嶋　正　巳

1　はじめに

1964年に毛沢東が「工業は大慶に学び農業は大寨に学ぼう」と全国によびかけて以来，大慶と大寨は，中国社会主義建設のもっとも先進的な典型とされ，「大慶に学び大寨に学ぶ運動」は，全国にほうはいとしておこった。この運動は，プロ文革をへて質・量ともさらにあたらしい段階へと発展した。

すなわち，量的側面からいえば，プロ文革以前は，大慶と大寨およびその他いくつかの単位がずばぬけた先進的典型で，一般の多くの生産単位はそれら典型とまだかなりのへだたりがあったが，今日の段階では，大慶・大寨式の工農業がすでに普遍化し，すべての工場に大慶の経験がもちこまれ，大寨式農業のひろがりはもはや個々の人民公社や生産大隊を単位としてではなく，全県全省を単位として報告されるようになった。

質的側面からいえば，「大慶・大寨に学ぶ運動」は，その展開のなかで広範な労農大衆のあいだに革命の深化と生産の発展の相互関連を具体的実践をとおして確信をもって把握させるようになり，林彪批判に関連するといわれる例のマルクス＝レーニン主義の著作を体系的に学習する整風運動と一体になって，未来の共産主義社会をみすえた社会主義建設の理論をあたらしくきりひらこうとするかってない特質をもった大衆運動に高揚しつつある。

このような観点からみるならば，大慶・大寨およびそれに学ぶ運動は，中国社会主義建設の現段階の特質を明らかにし・その将来を展望するためには，どうしても徹底的に分析されなければならない。同時にまた，それらの分析をと

おして，中国社会主義建設の実践が提起したいくつかのあたらしいマルクス＝レーニン主義の概念をつきつめて検証することができるであろう。とくにわたし自身は，大慶・大寨とそれに学ぶ運動の分析をとおして，社会主義労働が内容的・制度的にどのように改革されていったか，さらにそれが中国社会主義建設の前途＝共産主義への移行にどのようにかかわってくるか，という点を明らかにしたいと考えている。

この小論は，上記のテーマにとりくむ準備作業の一つとして，中国社会主義建設の総路線の核心であり，それゆえにまた社会主義建設における一般的法則性をもつと同時にきわめて中国的特質をもあわせもつ「自力更生」の概念について，大寨の事例のなかでそれがどのように貫徹し発展したかを確かめようと意図したものである。①

① 大慶と大寨は，ともに「自力更生」の最高の典型であり，両者はおなじ「自力更生」の精神でそれぞれの特殊な問題にとりくみ，一方は工業で他方は農業で中国が当面していた基本的問題の解決のみちをしめした。したがって「自力更生」の概念を追求しようとするなら，当然，大慶と大寨の両方にあたらなければならないが，本稿では事例を大寨のみにとり，大慶の「自力更生」は，『都市と農村の結合＝旧来の分業の廃棄の端緒』のテーマにふくめて別稿に期する。

II 新民主主義革命の時期の「自力更生」

成功した革命が例外なくそうであったように，中国革命もまた，その出発のときから「自力更生」の精神につらぬかれたものであった。

1930年から34年にかけて，毛沢東の指導によって江西省瑞金を中心とする解放区がうちたてられていたが，そこでは，蔣介石の五次にわたる包囲討伐をもちこたえて経済建設がおこなわれ，その生産力が革命戦争を物質的にささえるとともに，そこでのすべての革命と生産の活動が広範な中国人民の心に中共のめざす社会主義のイメージとしてやきつけられたのである。この包囲され封鎖された解放区の経済建設の基本方針の一つは，うたがいもなく「自力更生」であり，それによらざるをえないきびしい条件にかこまれていた。この時期の経済建設の総括であり指針ともなった毛沢東の文章『経済活動に心をそそげ』お

よび『われわれの経済政策』では，その内容においては「自力更生」の原則がはっきりとみてとれるが，しかしことばとしてはまだとりたてていわれていない。

1934年秋から「長征」がはじまり，35年1月遵義会議で毛沢東が党中央の指導権を掌握し，同年11月陝西省北部に根拠地をさだめた中共は，12月に中央政治局会義をひらいて，抗日民族統一戦線の樹立を軸とするあたらしい政治方針を確立した。毛沢東は，党活動者会議でこの新方針を説明した報告のなかで，革命への国際的援助と関連して「自力更生」ということばをもちい，つぎのようにのべている。『われわれ中華民族は，自分たちの敵と最後まで血戦する気慨をもち，自力更生を基礎として失われたものを回復する決意をもち，世界の諸民族のあいだに自立する能力をもっている。だが，このことはわれわれに国際的援助がなくてもよいという意味ではない。いや，国際的援助は，現代のあらゆる国あらゆる民族の革命斗争にとって必要である』。②

上記の引用における「自力更生」は，第一に，抗日戦争と中国革命を遂行する力量の源泉は民族の自力にあるという意味につかわれており，同時に抗日戦争勝利のためには国際的援助が必要であり期待もされている。現段階にいたるまで，中国はけっして「自力更生」と国際的援助を対立的にとらえたことはなかったが，この時期においては，当時の国際的国内的情勢を反映して，国際的援助への期待は比較的大きいようにみえる。第二に，ここでの「自力更生」は，まだ直接的・具体的に経済政策と関連させた内容はもっていない。根拠地の経済建設が実質的に「自力更生」の方針をうちたてていたことは前述のとおりであるが，抗日統一戦線の成立・抗日のための国共合作への政治的展望がからみあい，スローガンとしてはうちださなかったのかもしれない。

「自力更生」が政治と経済あるいは革命と建設を統一する政治路線の原則的なスローガンとして最初に大きくうちだされたのは，抗日戦争の勝利が明確になり，さらに息もつかずにつぎの全面的内戦にそなえようとしていた時期であった。

毛沢東は，1945年1月解放区の労働英雄と模範活動家の会議の席上，出席者

に経済活動に習熟して各解放区で食糧と工業品の全部または大部分を自給できるようにする必要性を説き，つぎのようにのべている。『だが，小私有経済の・分割された・遊撃戦争の農村という環境のなかで，どうすればこの目的を達成できるだろうか。……われわれは，自力更生を主張する。われわれは外からの援助をのぞむが，それに依存してはならず，自分の努力にたより，軍民全体の創造力にたよる。それでは，どのような方法があるだろうか。われわれは，軍民が同時に大規模な生産運動をおこすという方法をとる』。③

さらに毛沢東は，45年6月中共七全大会閉会の辞において，例の有名な「愚公山を移す」の寓話をひいて「自力更生・刻苦奮斗」を訴え，さらに同年8月，抗日戦争勝利後蔣介石の反革命全面内戦の危機にたいするそなえを説いて，延安の幹部会議における講話でつぎのようにのべている。『われわれの方針は，なにを根底とすべきか。自分の力を根底とすべきで，これが自力更生である。われわれは孤立してはいない。帝国主義に反対する全世界のすべての国ぐにと人民はみなわれわれの友である。しかし，われわれは自力更生を強調する。われわれはわれわれ自身の組織する力によって，内外のすべての反動派をうちやぶることができる』。④

上記の引用からみてとれるように，第三次国内革命戦争の時期にはいる前後には，「自力更生」ということばの内容はかなり明確なものとなり，政治と経済の大方向をしめすスローガンとして意味をもつようになる。

すなわち，この時期の「自力更生」は，政治の面では，抗日戦争勝利の成果を蔣介石とアメリカ帝国主義が結託して横取りしようとするのを粉砕し，それを中国人民のものとして新民主主義革命の成功に連続させるため，ほかからの援助をあてにせず，困難な条件のもとでも革命の成功を確信し，人民の自覚を基礎にして人民を組織し，反革命全面内戦の挑発にまっこうから対決する方針を意味していた。

またそれは，経済の面では，それまで10年の内戦8年の抗日戦の経験にもとづいて，農村で遊撃戦をおこない・農村を根拠地にして都市を攻略する戦略をとるばあい，それぞれの根拠地で食糧と必要な工業品の自給体制をととのえ

ることが重要な条件であり，そのためには解放区の農民の階級的自覚をうながし革命とむすびつけて生産を組織し，さらに軍隊と機関は戦争もやれば生産もやる体制をととのえ，この軍民が力をあわせていっせいに生産を組織する「軍民生産運動」の展開を意味していた。

以上のように第三次国内革命戦争の時期になると，「自力更生」の概念は，革命と生産を同一次元でとらえ，また自力を国際的援助よりも明確に優位にたたせており，すでに今日の段階の内容の骨格をそなえていたといえよう。

② 毛沢東『日本帝国主義に反対する戦術について』・「毛沢東選集」（邦訳北京外文出版社版・以下おなじ）第1巻233頁。
③ 毛沢東『経済活動に習熟しなければならない』・「選集」第3巻272頁。
④ 毛沢東『抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針』・「選集」第4巻17～18頁。

Ⅲ　「自力更生」と「労働蓄積」

1　社会主義革命の時期の「自力更生」

第三次国内革命戦争は，怒涛のようないきおいで人民の勝利に帰し，4年の短期間のうちに反動派を台湾においおとして，中華人民共和国を成立させた。新民主主義革命の勝利は，プロレタリア階級の指導のもとに，ただちに社会主義革命に転化した。いま農業面についてだけいえば，徹底的な土地改革をとおして農村の封建的生産関係と支配機構がつきくずされると，間髪をいれず資本主義と社会主義の二つのみちの斗争がはじまり，貧農・下層中農は，集団化の方法で戦斗的に社会主義へのみちをきりひらいた。この過程で「自力更生」のスローガンは，あらたな斗争の経験を吸収し，質的に高められ，社会主義建設のゆるぎない柱として確立されてゆく。

毛沢東は，この時期の中国農村の情況をつぎのようにえがきだしている。『中国の農村では，二つのみちの斗争の重要な面の一つは，貧農・下層中農と富裕中農との平和的競争を通じてあらわれる。ここ2・3年のあいだに，どちらが収獲をふやすかみてみよう。単独経営の富裕中農が収穫をふやすか，それとも

貧農と下層中農のつくった合作社が収穫をふやすか。はじめのうちは，一部の貧農・下層中農のつくった合作社だけが単独経営の富裕中農と競争していて，大多数の貧農・下層中農はまだ様子をみていた。つまり，双方が大衆のうばいあいをしていたのである。富裕中農のうしろには地主と富農がいて，かれらはときにはおおっぴらに，ときにはこっそりと富裕中農を支持していた。合作社の側には共産党がいたが，かれらは，安陽県南崔荘の共産党員のように，断固として合作社を支持すべきであった。ところが残念なことには，どの村の党支部もみなそのようにしたわけではない。こうしたところから混乱が生じた。……われわれの多くの地方党組織は，貧しい農民に断固とした支持をあたえることができなかったが，これも全部それらの党組織のせいにするわけにはいかない。上の方がまだ日和見主義の思想に致命的な打撃をくわえておらず，合作化のために全面的な企画をたてておらず，そのうえ，全国的な範囲でこの運動にたいする指導をつよめることもしていなかったのである。1955年にわれわれはこれらの仕事をしたので，数カ月で，情勢がすっかり変ってしまった』。⑤

上記の引用が正確にしめしているとおり，貧下中農と富裕中農との表面上の生産の「平和競争」は，その実，党の中枢部をふくめた激烈な路線斗争・階級斗争であった。貧下中農は，この斗争に勝利し合作化の優越性を大衆に明示したからこそ，1955～56年の例の「社会主義高潮・合作化高潮」をひきだしえたのである。この「合作化高潮」のひきがねとなった先進的合作社の貧下中農は，世論の面でも・人と物の面でも・また党の指導の面でもかならずしも十分でない条件のもとで，どのようにしてそのみちをきりひらいたのか。ほかでもなく「自力更生」の精神によってであるが，またこの過程において，「自力更生」の内容自体がふかめられたのである。

すなわち第一に，それは，表面的には「平和競争」であっても実際には激烈な路線斗争・階級斗争であったから，社会主義革命と社会主義建設についての確固とした政治思想なしでは，上記の情況のなかで集団化を突出させることは不可能であった。農民のひとりひとり，とりわけその指導幹部が自らの思想を革命化し，社会主義の前途をみきわめ，大衆のなかにある大きな社会主義的積

極性をひきだしてこそ，はじめて「自力更生」のいとぐちをつかむことができるのである。

第二に，革命化した思想，もりあがった大衆の社会主義への積極性をどのようにして物質的な力量に転化するのか。資金がなく資材もなく・他からの援助もあてにしないのだから，あるのは積極的な「人の要素」だけであり，この「人の要素」にたよってすべてを自力でつくりだすのである。「人の要素」とは，人民大衆の歴史を創造する知恵と生きた労働力であり，「人の要素」にたよるとは，大衆自身が過去の苦難と現在の高揚した階級的自覚をむすびつけ自力で独創的で実際的な方針と計画をつくり，集団労働で力をまとめ自分の手足だけをたよりに自然にはたらきかけ，自分たちに必要な基本建設およびその他の手段を完成し調達することである。つまり，準備された資金や資材のかわりに大衆の知恵と生きた労働力をもってするやりかたであり，中国では，これを「労動積累（労働蓄積）」とよんでいる。

この「労働蓄積」は，『社会主義的経済条件と生活条件をつくりだすうえでの労働者の自覚した自発的な創意であり』，レーニンのいう「共産主義土曜労働」の本質をさらに一段と発展させた中国的形態である。[6] それは，けっして一時的臨時的な運動ではなく，「愚公山を移す」大衆運動であり，中国社会主義建設の物質的基礎を最初に自力で創造する一般的な方法となった。

この「労働蓄積」における労働は，農業建設のばあい，まったくの無償労働のこともあれば，労働点数に計算されることもある。しかし労働点数に計算したところで，分配基本に自分たちの集団以外から追加援助があるわけではないから・またそれをあてにしないのであるから，労働に応じた分配をより精細に計算するだけで，本質的にはやはり無償労働である。この階級的自覚をてことした「労働蓄積」こそ，社会主義建設の段階における「自力更生」の枢軸となったものである。

2　大寨における「自力更生」と「労働蓄積」の事績

それではつぎに，大寨の事例をとおして，上述のところ，「自力更生」のい

とぐちとしての思想の革命化およびその枢軸としての「労働蓄積」について，いますこし具体的にみてみよう。

大寨生産大隊とそれをひきいる陳永貴の事績は，今日ではわが国でもよくしられているので，詳細な系統的な紹介は必要あるまい。⑦ 以下，行論の必要に応じて要約した部分的な紹介にとどめるが，大寨における社会主義的集団化の過程を追うことによって，大寨の典型としての真骨頂である虎頭山七つの谷を改造するエネルギーがどこからでてきたかを理解することができる。

大寨は，華北平原を尽きさせて聳立する太行山脈の西側，石ころだらけの山がはてしなくかさなる太行支脈虎頭山のふもと，山西省昔陽県にある。⑧ 昔陽県はその耕地の70%が段々畠というところであるが，なかでも大寨はもっとも条件がわるく，解放の当時，約800畝（1畝＝1／15ha）の耕地は全部傾斜地にあり，4,700枚以上に細分されていた。当時，大寨は戸数64（1970年には83戸440人），4戸の地主と富農が耕地の半分を占有し，48戸の貧下中農が20%の土地にひしめいていた。収穫量は「十年九災」をまぬがれた年で1畝あたり70キロであったから，その生活ぶりは「着物1枚で30年・家族6人で布団1枚，ぬか半年に雑草半年で食いつなぐ」状態であった。

この大寨が解放されたのは，人民共和国成立よりもずっとはやく，1945年8月八路軍によってである。解放と同時に土地改革がすすめられ，翌46年にははやくも「互助組」が組織されて社会主義的集団化への第一歩をふみだし，52年にはそれを初級合作社に発展させた。53年には，49戸社員50人で大寨の耕地の約半分をもつこの合作社が1畝あたりの収獲量を120キロまであげ（同年互助組は90キロ，個人農は80キロ），社会主義的集団化の優越性をみごとに証明したが，これが一つの限界点でもあった。

1畝あたりの収穫量を120キロまであげた要因は，第一には，貧下中農が解放された熱情を集団労働にたばねて発揮したことであり，第二には，国営銀行から7,000元を借入れ耕牛18頭を購入して生産に投入した効果と考えられる。もっともこの借入金は，その後をとおして大寨の唯一の生産資金借入れであり，翌54年には全額返済してしまった。

これ以上にさらに生産を増大させるためには，従来の方法の延長線上ではたかがしれており，農地そのものを根本的に大改造する以外には方法はなかった。すなわち，石ころだらけの山また山のなかにある大寨では，虎頭山の七つの谷間に石堤をきづいて洪水をくいとめ，谷底に土壌を堆積して新田をひらくと同時に水利をはかり，さらに従来の傾斜地にあった耕地を平田に改造して水土の流失をくいとめることである。解放までは現実的な構想としてはおもいもおよばなかったことであるが，社会主義的集団化のみちをきりひらいて自信と熱情をたぎらせていた大寨の愚公たちは，陳永貴を先頭に10年かかって「自力更生」でそれをやりとげようと決意したのである。

この大寨の集団化の第一歩をふみだしてから50人の貧下中農の力で七つの谷間をうめようと決意するまでの時期は，前節引用の毛沢東のことばのとおりの情勢であり，1955年後半から爆発する「合作化高潮」の起爆薬として革命的先駆が自力で社会主義へのみちをきりひらいた時期である。大寨は，その先駆のなかでももっとも先進的な一つであった。

大寨の貧下中農は，なぜもっとも先進的に合作化を成功させたのか。解放の時期がはやかったからではなく，解放後の階級斗争・思想斗争が激烈におこなわれ，その過程で陳永貴に指導された貧下中農が団結して思想を革命化したことが根本原因である。

解放当時の大寨は，1940年に日本軍のために壮丁46人をうしない，さらにその後青年26人が「参軍」したので，在村の壮丁は11人しかいなかった。したがって，土地改革後の貧下中農は共同耕作しか方法がなく，「互助組」はこうしてうまれた。「互助組」は，最初11人の壮丁で組織されたが，それでは壮丁労働力のない農家は耕作のしようがなかった。陳永貴はこれを聞くとただちに考えなおして「壮漢互助組」を脱退し7人の子供と4人の老人を中心とする10戸の「老人児童互助組」を組織し，その中心となって奮斗した。二つの「互助組」が競争するが，後者に凱歌があがる。前者は，自分の力をたのんで個人主義の観念がつよく他人のために自分の労働力や蓄力をだしおしんだので，しだいに戸別経営に後退していったのにたいし，後者は，互助合作しか食べてゆく方法

がなかったので，私心をすててしっかりと団結し創意をこらして集団労働をおしすすめたからである。

これは，単なる経済競争ではなく，二つの路線の斗争・思想斗争の勝利であった。陳永貴の指導とあいまって，大寨の農民たちは，この斗争をとおして社会主義的集団化の創造性にゆるぎない確信をもち，この「老人児童互助組」を中核にして互助合作の輪をひろげ，52年には貧下中農のほとんど全部を結集して初級合作社の成立へ発展するのである。

合作化の年に七つの谷間を改造する計画が提起されたのは，上記の思想斗争・階級斗争の勝利にささえられた確信にたってのことであり，また50人の農民がこの計画をやりとげようと決意したのは，上記の勝利を一段と前進させるための斗争をへてのことであった。陳永貴がこの計画を提起すると，当然のこと悲観的な見解や保守的な意見がだされ，一部の農民は動揺やためらいをみせた。くりかえして討論が展開された。その討論は，結局のところ，解放された農民はどれだけのことをなしとげることができ・なにに依拠してそれをなしとげなければならないかという問題をつきつめた。それは，つまり社会主義の前途に確信をもち・階級的自覚をふかめ・「自力更生」のみちを具体的にさがしもとめることであった。これらの問題についてひとりひとりの農民の認識がふかまり統一されたからこそ，かれらの決意がかたまったのである。自然にたちむかいこれを改造する斗いは，まず自らの思想の革命化を前提としてはじまったのであり，それがあってはじめて「自力更生」の旗をかかげられたのである。

1953年から毎冬，合作社の全社員は，家族もくわわって寒風のふきさらす谷間にはいり，夜明けから星のでるまで石をきり堤をきづき土をはこんだ。その奮斗ぶりは，本節注(7)の諸報告にくわしい。5年間の「刻苦奮斗」のすえ，大寨の愚公たちは七つの谷間の改造を基本的にやりとげた。谷間にきづかれた大きな石堤は180カ所延長7.5キロにおよび，山をめぐる水路が2本，ダム式の貯水池が2カ所，魚鱗型の段々畠とため池が3,000カ所以上，そして300畝の傾斜畠を水平の段々畠に改造し，80畝の新田が造成された。[9] 食糧の収穫量は急速にのび，1962年には総量275トン・53年とくらべて2.8倍，1畝あたりでは387

キロ・おなじく10年前とくらべて3.2倍に増大した。⑩

この間に大寨は，56年に高級合作社に移行し，58年には大寨人民公社大寨生産大隊となって，加入戸数・労働人口とも漸増しているが，『1953年から62年までの10年間に，土地基本建設に投じられた労働力は11万労働日に達し，平均すると各労働力が120労働日を投じたことになる。年間平均労働日を260日とすると，年間労働の46%が土地造成に費されていたことになる』。⑪

1963年夏大寨は，年間雨量を1週間に集中する豪雨をうけて大災害をこうむった。10年間の汗の結晶である谷間の石堤と段々畠の石垣がくずれ，耕地の20%以上が流失しあるいは土砂にうまり，住居の70%がたおれた。

陳永貴を先頭とする不屈の再建活動がはじまる。この再建活動も，最初の自然改造計画にとりくんだときと同様，まず政治思想工作からはじまった。かれらは「憶苦思甜（解放前の苦難をおもいおこし解放後の幸福を考え社会主義建設の決意をかためる）」の活動をくりひろげ，徹底的な「自力更生」の再建方針をうちたてた。すなわち，国家から救援の資金・食糧・物資をもらわないという「三不要」のスローガンをうちだし，これまでの大隊の蓄積と社員の個人貯金をはたき，その他は一切自分たちの手足にたよって石をつみ作物をおこし家を修復した。

この再建の苦斗は，同時に大寨のこれまでの農業技術の改革を総括してあたらしい発展段階にはいる過程でもあった。大寨の貧下中農たちは，これまでの10年間，石をきり土をはこんで谷間をうめると同時に，年々真剣に農業技術の改革にとりくんできた。「農業八字憲法」にそって創意工夫をこらし，土地生産性をたかめる努力をつみあげてきた。そのなかには，大寨独自の耕作法，たとえば「三深」・「四不専種」・「三不空」などと名づけられた方法がある。⑫63年の災害でかなりの耕地が流失したとき，大寨の農民は，この従来の技術改革を総括して，大胆に「減地不減産」の方針をうちだした。耕地が減少した条件のもとでも生産量はへらさないという意味である。

1966年にもまた，63年をしのぐ山津波が大寨をおそった。このときも前回と同様，徹頭徹尾「自力更生」の方針を堅持して困難を克服した。先述のとおり，

毛沢東が「農業は大寨に学ぼう」とよびかけたのは前回の災害を克服した1964年，この時期から大寨の階級斗争はもっとも激烈なかたちで爆発し，そのままプロ文革へとなだれこんでゆく。

3．「労働蓄積」と階級的自覚

さて，われわれは，以上の大寨の事績から「自力更生」の枢軸をなす「労働蓄積」について，つぎのような内容を確認することができるであろう。

すなわち，第一に，「労働蓄積」という方法を発想することそれ自体，思想を革命化し社会主義の前途にゆるぎない確信をもたなければできないことであり，すでに先述したところであるが，それを発想してから着手遂行し完成するまでの全過程もまた，一貫して思想斗争・階級斗争の過程である。

「労働蓄積」における労働は，それ自体は本質的に無償労働であり，直接的にはなんらの物質的刺激につながっていず，それをささえるのは鮮明な階級的自覚だけである。自覚は強制できるものではないし，また最初の決意はそのままで不磨不滅に永続するものでもない。それゆえ，「労働蓄積」の過程は，つねに外部から注入されたものではなく，労働提供者の内面からふきあげてくるものに基礎をおいた政治思想工作と正確に結合してすすめられなければ完遂しうるものではない。またこの政治思想工作は，「労働蓄積」の過程が単に局部的短期的なものでなく，長期にわたる大規模なものになればなるほど，情熱にだけ依拠した主観主義的なものではなく，すぐれて理論体系的な内容をもったものでなければならない。

大寨において，「自力更生」の建設がすすむにしたがい自発的な毛沢東著作の学習運動がさかんになったのは，この意味で必然的であり，またそれをおしすすめる指導＝政治思想工作があったからこそ，50人5年で七つの谷間をうめおおせ，さらに両次にわたる流失にめげず再建しおおせたのである。もし正確な政治思工作が結合されなければ，そのときから「労働蓄積」は瓦解してしまうし，強行されればそれは「強制労働」にほかならず，「造反」を蓄積するだけの結果となろう。

第二に，正確な政治思想工作と結合された「労働蓄積」過程の労働は，それをささえている主柱が物質的なものではなく・とぎすまされた階級的自覚であるだけに，その進行にともない他の形態の労働（いくらかはあるいはかなりの程度報酬をあてにする労働）よりもずっと急速にその内容において共産主義的要素を培養する。つまり，「労働蓄積」における労働は，それがはじまると日日にその面貌をあらため，たえずあたらしい内容の労働をうみだすのである。

レーニンは，共産主義的労働を定義してつぎのようにのべている。『狭義の厳密な意味では，共産主義的労働とは，社会のための無償労働であり，ある特定の義務をはたすためではなく，ある特定の生産物にたいする権利をうるためにではなく，またあらかじめ規定された法定の基準作業量によることなしにおこなわれる労働，自発的な労働，作業基準量なしの労働，公共の利益のために働くという習慣と・公共の利益のために働かなければならないことを自覚した（そして習慣となった）態度にもとづく労働のことであり，健全な身体の欲求としての労働のことである』。[13]

「労働蓄積」における労働は，「刻苦奮斗」の労働であって「健全な身体の欲求」ではなく，またある特定の義務をはたし権利をうるための労働の余販にそれと平行しておこなわれるのであるから，それはけっしてそのまま共産主義的労働ではない。しかし，重要な側面でレーニンのいう共産主義的要素を突出させていることは，大寨の事績にてらしてあきらかであろう。

「労働蓄積」の労働にみられるいくつかの共産主義的要素は，しかし，労働のはじまったその日から自動的にそなわっているものではない。それは，日々の具体的な労働実践をとおしてしだいに発現するのであり，具体的な労働実践における困難を解決し克服してゆくたびにその共産主義的風格を成長させてゆくのである。いうまでもないが，このような傾向が直線的に進行してそのまま10年・20年のうちに完全な共産主義的労働に到達するのではない。その実現は，共産主義の経済的基礎を構成するさまざまの条件と相互に関連しており，その成熟をまたなければならないが，「労働蓄積」の労働は，労働の側から他の条件における共産主義的成熟をうながす積極的な役割をはたすことになる。

大寨の事績において，1963年の大災害のとき，「三不要」のスローガンをうちたて社員の個人貯金まではたいて国家援助を謝絶した真意は，大寨への援助分を他のより緊急なところへまわしてもらいたいというのであった。これは，「破私立公」をきわめた観点から個人・大寨・全国家をまったく一視同仁にみる思想であり，大寨の農民が10年間の谷間をうめる無償労働の実践のなかでうちきたえた思想である。大寨から他地区へまわされた国家援助は，物質的なものとともに共産主義の精神をもそこへおくりとどけたことであろう。同時に，国家援助を謝絶したのちの大寨の再建労働は，それ以前の労働よりもその積極性・その創意工夫・その労働規律においてさらに一段と活発ないきいきとしたものになったにちがいない。

「労働蓄積」の労働における共産主義的風格の成長は，当然のこととして，通常の有償労働の労働態度に反映する。政治思想工作が正確に主導してゆくならば・有償無償の区別なしに同様の階級的自覚で自律された労働がはやい速度で拡大してゆくであろう。そしてこの労働における階級的意識の高揚が，農民の自発的・主体的な農業技術発展の契機となる。

大寨の経験のなかでは，いくたの大寨独自の農業技術の展開があった。これらはいずれも，上級からの指示や書物から学んだものではなく，大寨の農民の創意工夫であるが，その特長は，徹底的な労働集約的方向にそっていることである。物質的刺激に誘導されたものであれば・つまり単純に投入労働量とその直接的報酬の比率で技術改革を刺激するのであれば，「三深」・「四不専種」・「三不空」・「一株管理」といった技術展開は不可能であろう。そこには，「労働蓄積」の基本的思考が確固として介在している。このような技術発展の方向は，まだきわめて初歩的・端緒的なものであるけれども，技術発展の階級性を明瞭にあらわしており，千里のかなたにではあるが共産主義をみすえた・ついにはそこへゆきつくところの技術発展の方向をさししめしている。

第三に，「労働蓄積」の労働は，無償労働であることを特質とし，たとえ労働点数に計算されても，分配基本が追加されるわけではないから，1労働日あたりの分配額をへらして結局は「労働蓄積」部分を無償化すること，先述のと

おりである。またそうでなければ，生きた労働をもって準備された資金・資材にかえるという「労働蓄積」の意味はない。

しかしながらずっと長期の観点からすれば，「労働蓄積」もまた，資金・資材のかたちで投入された基本建設投資が回収されるのとおなじく，その蓄積者に回収される。「労働蓄積」によって完成した基本建設部分は，当然将来において，一定の生産量をあげるために投入される生きた労働を節約する効果をあらわし，その分だけ生きた労働一単位あたりの分配額を増加させることによって，蓄積者にその労働を償還する。

この「労働蓄積」部分の回収は，「労働蓄積」の対象が直接労働節約的効果をうむものにむけられ・その規模が比較的小さく・蓄積の期間がみじかければみじかいほど，蓄積者にたいする償還が直接的かつすみやかにおこなわれ，蓄積者はその償還を実感をもってうけとるであろう。逆に「労働蓄積」の対象が直接労働節約的効果をもたらすものではなく・その規模が大きく長期にわたるものであれば，それだけ蓄積者への償還がおくれあるいは稀薄になり，無償労働の実感がつよまるであろう。

先述のように無償労働をささえるものが蓄積者の階級的自覚に基礎をおく政治思想工作であるとすれば，「労働蓄積」の対象としてどのような事業にとりくむことができるか・どれだけの規模と期間それにとりくむことができるかは，まさしくこの蓄積者の階級的自覚の水準とそれをひきだす政治思想工作の正確さにかかっている。

もし蓄積者の階級的自覚の水準がひくければ，当然，蓄積分の早期の直接的な償還が必要であろう。したがってまた，「労働蓄積」の対象となる事業の質・量とも限定されてくる。これでは，「労働蓄積」を枢軸として「自力更生」の方針をつらぬくことはできない。さらにまた，「労働蓄積」の早期かつ直接的な償還が要請される条件のもとでは，対象事業規模が大きくなればなるほど，「労働蓄積」によるよりも，最初から機械化された物化労働を投入し・生きた労働を節約したほうが効率的であり，このばあい「労働蓄積」的形態が可能なのは一般賃率が極端に低位にあるときだけである。しかしそれでは，「労働蓄

積」的形態をとっても社会主義的「労働蓄積」とはいえず，またそこからはなんらの将来展望的な創意工夫や労働の積極性はひきだされないであろう。

逆にいえば，階級的自覚の水準がきわめてたかく，しかも政治思想工作が正確に結合されてつねにそれを鼓舞激励しているような条件のもとでは，あらゆる困難な事業，長期大規模の事業にもとりくむことができるし，またそのとりくみの過程で創意工夫をこらし・あたらしい技術や組織をつくりだし，それによって最初の机上計算をはかるにこえた飛躍的な生産発展をかちとり，長期の観点かすれば最初の蓄積分を十分回収することが可能である。大寨の事績・10年間その総労働日の46%を「労働蓄積」にふりむけて10年目にはその総生産量を2.8倍にひきあげたという事実が，このことを証明している。

とすれば，「労働蓄積」は「政治優先」がその生命であり，それは鮮明な階級的自覚にささえられてはじめて経済理論化されうるのであり，さらにいえば，このような「政治優先」を生命とする「労働蓄積」を「自力更生」の枢軸にし，その「自力更生」を社会主義建設の原則にすえる理論体系こそ，解放された人間が能動的に位置づけられる真の意味の社会主義経済学といえるのではないか。

このような理論化作業は，その後の情勢の発展とともに急速にふかめられ，社会主義建設の総路線としての「自力更生」は「農業基礎論」として体系化され，また国際共産主義運動の総路線の問題点として国際分業と「自力更生」の社会主義建設の関係がみきわめられてくる。これらの問題については，次節以下で展開する。

（未完）

⑤ 毛沢東『「鶏の羽ははたして天まで飛べるか」という文章にたいする評語』，「毛沢東論文選」（邦訳北京外文出版社版・以下おなじ）598～99頁。

⑥ レーニン『偉大な創意——共産主義土曜労働について』・「レーニン全集」（邦訳大月書店版・以下おなじ）第29巻428頁。

⑦ 大寨の事績を系統的に紹介した邦語文献としては，「北京周報」1964年第25号所収の陳学農『ある貧しい村の変遷』，「人民中国」1967年12月号所収の『新中国の愚公たち』，およびこれらの記事に取材しながらプロ文革後の「大寨に学ぶ運動」の新段階までをふくめて体系的に中国社会主義を展望した浜勝彦「中国

の現代と未来——農業と政治経済学」（1972年三一書房刊）・その第1章大寨＝中国の前衛的農民像，を代表的なものとしてあげる。以下の本文中の大寨の具体的事例は，上記三編から引用しており，一一注記しない。

⑧ 毛沢東『愚公山を移す』の太行山はこの太行山であり，寓話は「列子」に出ることからすれば，この地方の人民は二千数百年の昔から山を移すことを願望しつづけていたのであろう。

⑨ この数字資料は，注(7)の「北京周報」論文（33頁）および「人民中国」論文(23頁)からひいたが，両者に若干のくいちがいがある。「北京周報」では石堤延長が15キロとなっており，「人民中国」では80畝の耕地増加が書かれていない。事情を詳かにしにくいが，後者は次注⑩と関連があるかもしれない。一たん造成ののち，転換したものとみられる。

⑩ 1畝あたりの食糧収穫量ののび率が食糧総収穫量ののび率を上まわっている点からいえば，非食糧作付面積が急増したのでなければ，耕地総面積が減少（単純な計算では13%減）したことになる。前掲「人民中国」論文では畑を林にきりかえた記事もみられるが（30頁），これは新耕地増でうめあわされており，事情を詳かにしにくい。「減地不減産」のスローガンが提起されるのは，1963年の大災害以降であるが，あるいはこの傾向は，その数年前からはじまっていたのかもしれない。

⑪ 浜勝彦・前掲書31頁。

⑫ 「三深」とは深耕・深掘・深植，「四不専種」とは麻・野菜・穀物・豆類など四種類の作物を同一土地に単一作付せず交錯栽培することによって，土地空間を最大限に利用すること，「三不空」とは田畑のへり・はし・四隅をむだにしないといった方法であり，年々このようなスローガンがかかげられ，「一株づつ管理する」やりかたをくわえて，徹底的な労働集約的な土地生産性の向上政策をおしすすめた。

⑬ レーニン『古来の制度の破壊から新しい制度の創造へ』・「全集」第30巻538頁。